

## 西屋城の合戦 ⑤

西屋城合戦を記録する当時の史料はありません。最も古い記録でも一〇〇年以上後の元禄四年(一六九二)に成立した『作陽誌』で、その後には書かれた資料もいずれも『作陽誌』を参考にしていますので、この記述をもとに話を進めてみます。

井坂合戦の後、宇喜多方の西屋城の将兵は籠城を続け、ついに積雪の時期となりました。攻め手の毛利方の兵士は脛<sup>すね</sup>まで雪に埋もれ、凍傷で指が落ちたり肌が裂ける者が続出したため、ついに囲みを解いて撤退しました。城主の斎藤近実は、天正一〇年(一五八二)一月十七日に將兵を集め酒宴を催します。酒が回る



西屋城山麓



斎藤氏の墓と伝えられる石塔 (馬場)



苔口氏墓地内にある古い石塔の残片 (津山市河辺)

と兵士たちは踊り歌い、場は大いに盛り上がりました。この酒宴の参加者の中に坂手という兄弟がいました。

坂手兄弟は日頃から思いがつた言動が多かったのですが、大きな手柄もたてていたので周りの兵士も遠慮してとがめることをしなかったため、この日は近実を批判する歌を作つて歌い出す有様でした。しかし、近実は宴席でもあるので、見ないふりをしてその場をやり過ごし、酒宴は無事終了しました。

しかし翌日、將兵たちが酒宴のお礼のあいさつに次々と近実の屋敷を訪れていたところ、後から来た坂手兄が門に入ろうとすると、近実の

家来たちがこれを取り押さえ殺害し、まだ屋敷に来ていなかった弟は、堀田源兵衛という家来が弟の所へ行き、これも殺害してしまつたため、坂手兄弟の一族は宇喜多方から去つて毛利方に従い、西屋城の内部情報を毛利方に話してしまいました。

そして、雪が解けて暖かくなると、毛利方は再び西屋城を包囲します。坂手一族によつて敵方に弱点が筒抜けとなつた西屋城はひとたまりもなく、近実や苔口宗十郎らは城を脱出し、西屋城はついに落城してしまいました。

『作陽誌』には、西屋城の麓に「斎藤別墅」(斎藤の別荘)があり、坂手氏が殺害された場所とされています。山麓には、かつて西屋城の侍が住んでいた居宅跡があつたともあります。

この戦により西屋城は毛利方の手に落ちましたが、当時県南部では織田信長軍の司令官・羽柴秀吉と毛利方が対峙し、有名な備中高松城の水攻めが行われようとしていた頃です。

この戦は、六月の本能寺の変で織田信長が死亡したことにより和睦されましたが、和睦条件として毛利家の領地は高梁川より西までと決められたため、美作国は羽柴秀吉傘下の宇喜多家の領地になります。これによ

り、西屋城も再び宇喜多家の持城となりました。『美作古城記』には「川端丹後が城主となつたが、以後はわからない」と書かれています。秀吉の天下統一により、国内での戦がなくなつたことで必要性がなくなり放棄されたのでしよう。

斎藤近実は西屋城脱出後、祝山城(津山市吉見)にいたようですが、その後の足取りは定かではありません。子孫は小田草神社の宮司として続いたとも、また津山城下町の大年寄役(城下町の責任者)を務めた油屋斎藤家であるとも言われます。

苔口宗十郎は文禄四年(一五九五)に河辺(津山市)に土着し、代々続いていきます。

毛利方の中村頼宗は、羽柴と毛利の和睦条件に従わず岩屋城(津山市)に籠つて抵抗を続けますが、毛利輝元の命令によりやむなく城を退去し、毛利の本拠地である広島に行つたとも、鳥取県の佐治に行つたとも言われ、その後の行方は定かではありません。

参考:『作陽誌』『奥津町史』『鏡野町史』『美作古城記』『美作古城史』『美作名門集』  
協力:石田秀樹

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下  
電話(0868)5417733